

# ミンダナオの風

執筆編集\*松居友 発行:ミンダナオ子ども図書館



戦争の絶えなかったイスラム地域ピキット

その中央にそびえるスペイン時代の要塞跡で、

平和の祈りをすることは、長年の夢だった。

ここは、日本とも深い関係のある要塞跡で

第二次世界大戦の時に、ここに日本軍の司令部が置かれ

激戦が展開され、多くの犠牲者を出した場所だ。

地下には、防空壕が掘られているが

未だに、調査はされることがないという。

この地で、私たちは、子どもたちと一緒に

ミンダナオ、フィリピンそして世界の平和を祈った

ミンダナオ子ども図書館の若者たちが

自らの手で企画した、第六回平和の祈りの祭典！

ピキット市長、多くの村長、そしてイスラムの聖職者、

マンボ族の首長たち、プロテスタント教会の牧師、

地元カトリック教会、オブレート会の神父も参加し

子どもたち若者たちと共に祈った。

スペイン軍が滞在した時代からはじまり、

第二次世界大戦のときの、日本軍との激戦を経て、

さらにフィリピン政府軍とイスラム反政府組織の

40年にわたる戦争で犠牲になった多くの人々、

とりわけ戦闘の狭間で、死んでいった

子どもたちのために、心から祈った！

現在、フィリピン政府とMILF反政府勢力との

平和交渉が始まった事もあり、本当の平和がくるように

そして、隣国である日本や韓国、ロシアや中国

インドネシアや東南アジア諸国と平和のなかで

隣人としての友情を結ぶように、

世界の人々と、平和のうちに愛を分かち合えるように！

私は、集まった人々の前で、日本人として

日本軍が行った残虐な行為を、心から謝罪した



## 日本軍詳細跡での平和の祈り

松居 友

絶えず戦闘に見舞われてきた、イスラム地域、そのなかでも特にひどかったピキット市には、スペインの侵略時代に作られた要塞跡が残っている。ここには、第二次世界大戦時代に、日本軍の司令部が置かれていて、激戦が展開された場所でもある。

要塞は、平原を見渡せる山上にあり、東南アジアで最も大きいと言われているリグアサン大湿原をはじめ、遠くフィリピンの最高峰のアポ山まで、360度の展望が満喫できる。

しかし山中には、無数の防空壕があり、多くの死者が眠っていると知られていて、地元の人々は恐れて近寄らない。政府による調査も、されていない。

ミンダナオ子ども図書館を始めた理由は、2001年にこの地でたっくさんの戦争避難民に出会ったからであることは、度々述べたが、その後、この要塞跡の経緯を聞いて、いつかここで平和の祈りの祭典を開催したいと思っていた。

しかしその後も、戦争は3年から5年おきに繰り返されて、平和の祈りはこの地である気持ちになれなかった。ところが今年、新聞報道でも流され

たように、日本政府も含め長年の努力が実って、フィリピン政府とイスラム反政府組織MILFとが、和平合意へ向けた第一歩を、歩み始めることに決まった。前号でこの件には、詳細に触れたのでここでは触れないが、まだ多くの問題も含んだの出発ではあるもの、とりあえず大きな戦争は回避されたので心からホッとした。

しかし国際的に見ると、一方で日本では尖閣諸島を出汁にして、中国との対立をあおり、新たな戦闘を起さそうとする動きが表にでてきた。これは、フィリピンでも同様で、南シナ海をめぐる対立が、主にアメリカに先導される形で動いている。

フィリピンは、表向きはアメリカ力りだが、裏では政治も経済も中華系が握っている部分が大きく、簡単に戦争に走るような動きは無いだろうが、日本の方がアジアでの孤立を深め、自衛隊を国軍にし、大量の武器を購入して武装し、戦争を作る仕掛けに慣れていないだけに、第二次世界大戦の時のように、簡単に引つかかって参戦するのでは無いかと、ミンダナオから見ていると多少不安だ。杞憂に過ぎないとは思うのだが・・・。

話はそれだが、そんな思いも加味して、ミンダナオ子ども図書館では、子



どもたちと平和の祈りの祭典を、戦闘の絶えなかつたピキットの日本軍もいた要塞跡ですることにした。

会場には、ピキットの市長、村長たち、マノボ族の首長たち、イスラムの聖職者、プロテストとカトリックの牧師と司祭も参加して、祈りの言葉を述べてくださった。

私は最後の挨拶で、この祭典に足を運んでくださった方々、そして若者や子どもたちに、心から感謝を述べると同時に、ミンダナオの戦争で亡くなったすべての霊、とりわけ罪も無く戦争の犠牲になつた子どもたちや人々に、神の愛と平安があることを願い、マノボ族



やイスラム教徒やクリスチャンであるミンダナオの人々を前にして、日本人として、日本軍が犯した過ちを心から謝罪した。

日本軍が滞在していた事もあり、このイスラム地域には、日本人の未裔も意外と多い。私も数人会った。

また、マノボ族などの先住民族に対して日本人は、穴を掘って大量に生き埋めにしたり、山に逃げて、マノボ族を襲って人肉を食べたりしている。(辺見庸「もの食う人々」角川文庫を参照) それゆえに、ミンダナオでは、子どもが寝ないと「日本人が来るよ」と言うて脅して寝かせる習慣があるほどだ。



またマノボ族の人たちと一緒に山に逃げて、自分が日本人であることを隠し続けて生きてきた人も意外と多く、イスラム地域以外でも、反政府勢力であるNPAのいる貧しい山奥の集落に行つてみると、「実は私は日系だよ」と、背後から密かに声をかけられた体験もいくつがある。

### マノボ族の集落で

#### 戦闘が起きている

そんなマノボの集落の一つで、フィリピン政府軍と反政府組織NPAとの間で先日戦闘が起こり、山奥の集落であるがゆえに人数は少ないものの300名近い先住民が、自分の集落の家や家畜を置いて別の村に逃げてきているという報告を聞き、救済支援に向かった。(その様子は、サイトに載せた。検索「ミンダナオ子ども図書館」)

避難民のなかには、ミンダナオ子ども図書館の奨学生たちもいるだけに、とても放つてはおけない!

幸い避難民は、ハウスペースと言って、親戚の家などに避難しており、路上で寝るような事態にはなっていないが、裸足で着るものもろくに無く、まずは衣料と靴の支援をした。

支援活動をしている合間にも、さら

に奥に広がっている山間のジャングルからは、政府軍の発射する長距離砲の音が、ドーン、ドドーンと胃のそこに響くように聞こえてくる。機銃掃射の音も聞こえた。

しかし、ほとんど裸足で集まってきた人々や子どもたちのうれしそうなお顔を見てしまうと、そんなことに負けてはいられない。恐れも疲れも吹っ飛んで、人々との交流が生まれていく。

支援がくるという事、しかも、スカラシップや読み聞かせ、医療などで、すでに関係してきた謂わば友人たちが、心から心配して来てくれたということ、



それが不安のなかで暮らさざるを得ない、貧しい集落の人々、とりわけ避難民の人たちに、どんなに心強く感じられるかは、その喜ぶ笑顔を見るとよく理解できる。

今回は、まずは衣服の支援をしたが、この戦闘が長引けば、食料の問題が大きく出てくるだろう。子どもたちに限定した、炊き出しをしなければならぬいかもしれない。

また、戦闘が終わって山奥の集落に戻れたとしても、自給用の畑は荒れ果て、家畜もいず、草葺きの家の屋根は腐り果てて雨漏りもひどく、そうした家族の救済支援も新たにしていかななくてはならないだろう。

戦闘の目的は、先住民族を避難民化させたあげく自給地から追い出して、その後に土地を所有して、バナナなどのプランテーションなどを広げることにあるという、話も現地から聞こえてくる。



松屋 陽

シンカマスという、カブのような根菜がある。

野菜のくせになんともなく甘いので、現地では果物として売られている。気温に強く、暑い日なんかに入気うしい。

そんなシンカマスを地方の政治家の土地で育て、町の市場の隅で売っている家族がいる。その娘の一人が、ジェザベル、MCLのスカラーだ。

15歳、高校一年生、控えめだけど情熱的で、相手をよく気遣う優しい子だ。他愛もないおふざけで泣き笑いする目の球は、両方とも曇ったように白い。白内障というやつらしい。

ある週末、ビデオカメラを持ってジェザベルの家を訪ねてみた。MCLのあるキダバワン市の外れのまた外れに、シンカマスの畑が延々と広がっている。

お父さん、お母さん、兄弟、そして親戚一同と思われる村中の大人子ともが、その日売る分のシンカマスを掘り出しては川へ運び、ナイロンの靴下を片手にはめて、一つ一つコンコン洗っていた。それを根っこから編めば、シンカマスの房の出来上がり。

ふと、親子の姿が目を引く。浅黒く、ちぢれ髪の男の子。丸裸で水を浴びている。

母親は太つちまで荒っぽそうだが、わが子をさも大切そうに洗っている。ぬれた体がうれしそうにざらざら光る。

一房10個のシンカマスで、20ペリ、約40円。ジェザベルと子どもたちは、シンカマスの房を片手に一つずつ持って、人の集まる広場へ売り歩きに行った。僕は、それを夢中でカメラで追う。

向こう見ずに走る車の間をすり抜け、道行く人たちに売り声を上げ、シンカマスは一つまた一つと売れていった。

雨が降り始める。

僕は、いい加減ジェザベルのストーリーを追うことには疲れ、無理に集中してきた意識を解放した。

「はぁ・・・」(こ)というのは自分の性に合わないんだな。散漫した意識が快い。やっと正気に戻れたようだ。

すると、世界が目映る。

駐車された三輪車の中で、男が雨宿りしながらタバコをふかしている。雨は、ますます地をたたきつけ、タバコの煙は空へと昇る。小さな避難所の影で、男はぼんやり宙を見つめていた。

少し歩くと、制服を着た少女が、ショーケースに並ぶ新品の携帯に見とれてい

る。ビデオカメラに気づくと、恥ずかしそうに笑い、体をそむけた。

ストーリーを追いかけると、時間の錯覚に振り回される。ストーリーから見た「今」の定義は、水平に伸びた永遠を真つ二つに切るナイフ。

そのナイフの片面には過去の記憶、片方には未来のビジョンが鏡のように反映されている。その先端は、1ナノメートルより薄く、ゼロに等しいそうだ。

今度は、定義ではなく、感覚の今に意識を向けてみる。

それは、永遠の波に飲み込まれるひと時でも、時をかける旅人でもない。それは、動きを超えた静寂、変化を超えた不変。触れられず、見逃せない、言葉の終わり、言葉の始まり。何秒経っても、今。何歩進んでも、(こ)。何がどうなっても、これ。

映像を撮っていて、感じる。輝いて見えるのは、決まりきった起承転結のストーリーじゃない。因果や損得に見えないイメージじゃない。輝いているのは、常に今だ。

それは、水浴びをする浅黒い幼児だったり、その子を宝物のように洗うお母で



んだり、雨の三輪車でタバコを吸う男だったり、新品の携帯電話をガラス越しに眺める女子学生だったりする。それは数え切れない形で現れるが、いつもそこにあるので、見つけることも見失うことも出来ない。

誰がどうしてどうするかなど、はっきり言ってもいい。

その生き方が気高いか汚れているかなんて関係ない。

彼らの意見や観点なんて、僕のそれと等しくしようもない。

今、僕らが明らかに、あるがままに生きていく。それ以外に何がある。

命は、残酷に美しい。



# 自由都市・堺 平和貢献賞で、 こんな報告をしてきました！

自由都市・堺 平和貢献賞という、榮譽ある賞をいただき光栄です。

この賞は、私個人に送られたと言うよりも、ミンダナオ子ども図書館でいっしょに暮らしている、120名あまりの極貧の状況から来た子供たち、外部に住んで学校に通わせてあげている、600名近い子供たちにこそ捧げられるべき賞だと思います。

その理由を、ここでご説明させていただきます。

意外と知られていないのですが、フィリピンの南の島ミンダナオ島は、北海道ぐらいの大きさの島なのですが、ここ40年ほど、3から5年おきに大きな戦争に見舞われている不幸な島です。

**国連の調べによりますと、戦争避難民の累計が世界一。**

2001年、現在図書館のあるキダパワンのロムロ・バリエス司教から、「松居さん、今、この先のイスラム地域ピキットで、戦争があり、避難民が大勢出て、大変なことになっているんですよ。行ってみますか・・・」といわれて、物見遊山で現地に行って、驚いたこと、驚いたこと！

見渡す限り、至る所に避難民。難民キャンプというから、テントにいるのかと思ったらとんでもない、その辺から切ってきた木の棒に椰子の葉か良くてビニールシートをかけたような下に、1年以上、このような生活を強いられている。

**このときの避難民は100万人、4年前の戦争の時は、80万人！**

**何だこれは！**

人々の生活状態のひどさもさることながら、何よりも心を痛めたのは、あの快活で明るいフィリピンの子供たちが、全く笑顔どころか、表情すら失っていることでした。

**手を振っても、笑顔も反応も無いのです！**

私が、ミンダナオに行ったのは、落ち込んでいる気持ちを立て直したかったためであり、それをしてくれたのが、明るく快活な子供たち。私を救ってくれたミンダナオの子供たちが、このような悲惨な状況に置かれている。

**これは何とかしたい、何とかしなきゃ！と強く思いました。**

**そのとき浮かんできたのが、読み聞かせ、読み語りでした。**

**この子たちに絵本の読み聞かせをしてあげたら、少しは笑顔が戻るのではないだろうか！**

**トラウマが消えるのではないだろうか。**

病気の子どもがいるので、病院に運ぼうと思って話をしたら、現地の職員から、「どこのNGOに属しているのか」、「NGOに属していない」と答えると、助ける許可は出せない、と言われて強い怒りを感じました。



「イエスは、どこのNGOに属して、病の人を救ったか！」しかし、現実を変えることは出来ません。

そのときに相談したのが、当時、高校に行かせてあげていた3人の若者たち。

極貧の中から来た子たちですが、「自分たちでやってみる！」と言って、何と半年でフィリピン政府の法人資格を取ってしまった。これが、ミンダナオ子ども図書館の始まりです。

そのとき、中心になって行動してくれたのが、ここにいる妻です。

ミンダナオ子ども図書館が、なぜ、図書館でありながら、読み聞かせを中心にしているものの、スカラシップを採り、医療を行い、戦争や洪水難民の救済を行い、保育所建設や植林支援を行っているのか？

「変な図書館ですねえ・・・」と現地でもよく言われるのですが、私は日本人で現地語も出来ません。

読み聞かせをするのも子供たち、医療活動をするのも子供たち。

戦争や洪水が起こって、難民救済支援に向かっていくのも子供たち。

洪水対策と生活支援をかねたゴムの木の植林をするのも子供たち。

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップの子どもや若者たちなのです。

ミンダナオ子ども図書館では、イスラム教徒、キリスト教と、先住民族がほぼ等しくなるように採用しています。

600名を超えるスカラシップや里子たちの中で、特に親のいない子や三食たべられない家庭の子。

学校が遠くて通えない子たち、120名あまりが共同生活しているのですが、イスラム教徒、キリスト教徒、先住民族が、宗教や種族の違いを、敬意を持って認め合って、仲良くいっしょに生活しています。

そんなこと、考えられない、と言う人もいますが、全然問題は起らないどころか、読み聞かせは当然のこととして、イスラム地域の難民救済にも、キリスト教徒地域の洪水にも、先住民族地域の貧困にも、全員が協力し合って立ち向かう。

それゆえに彼らこそが、ミンダナオの子どもや若者たちこそが、この崇高ある賞を受け取るべきだと思うのです。

私には三つの名前があります。松居友は、愛する父と母からもらったもの。

ヘルマン ヨーゼフは、カトリック教会で、尊敬するヘルマン ホイヴェルス神父から戴いた洗礼名。

そして、もうひとつ、アオコイ マオンガゴン。



これは、マノボ族の酋長として、洗礼を受けていただいた名前です。

意味は、「心から人を助ける 我らの友」

両親からもらった「友」に、心から人を助けると言う名がついたのですが、この名前は、この賞と同様に、ミンダナオの貧しい子供たちにこそふさわしいと思います。

彼らこそ、アオコイ マオンガゴン、「心から人を助ける 我らの友」だからです。

嘘だと思ったら、日本の悩んでいる子供たちや若者たち、中高年の方々、自殺やいじめに走る前に、一度、ミンダナオ子ども図書館にいらっしやることをおすすめします。

心から人を助ける 我らの友、ミンダナオの貧しい子供たちが、皆さんを救ってくれると思いますよ。

郵便振替口座番号 00100 0 18057  
加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』  
購読料程度の自由寄付でも結構です。よろしくお願いします。

### 第3回自由都市・堺平和貢献賞

国際平和に通じる活動に取り組む個人や団体を堺市が顕彰する「第3回自由都市・堺平和貢献賞」(朝日新聞社後援)の大賞に、ミャンマーの民主化運動指導者アウンサンスーチーさん(87)と、東日本大震災の復興支援に取り組む台湾赤十字組織(台北市、王清峰会長、約700人)が選ばれた。奨励賞はNGO「ミンダナオ子ども図書館」館長で児童文学者の松居友さん(59)。それぞれの活動を紹介する。(森嶋俊晴)

大賞 ミャンマー民主化運動指導者  
アウンサンスーチーさん



山崎和家子さん(左)の腰を支えるアウンサンスーチーさん=1月2日、ミャンマー・ヤンゴン、ガールスカウト大阪府連団提供

大賞 東日本大震災の復興支援に  
取り組む台湾赤十字組織

王清峰会長



奨励賞 NGO「ミンダナオ子ども図書館」館長 松居友さん

### 絵本読み聞かせ 進学を手助け



武蔵野力と政府との紛争が続くフィリピン南部のミンダナオ島で、児童文学者の松居友さん(59)が目指すのは「孤独や重荷を背負って来た子どもたちに、ほっとする場所を提供することだ」。

2001年、現地のカトリック司教の案内でイスラム教徒の避難民キャンプを訪れた。空襲と飢饉で泣き止んだ顔がそのとき面うつしてしまつたような表情の子ども。「この子たちのために生誕を捧げよう」と移住を決めた。

震災も水害もなく、竹で積んだ小屋ではほほ自給自足の生活を営む美しい山岳地帯などに足を運び、絵本を読み聞かせる移動図書館活動を始めた。子どもたちの笑顔に触れ、住民との絆を深めた。02年、島中部の北コタバト州の標高8000級の高原に「ミンダナオ子ども図書館」(MCL)を開館した。

「L」を略称。聖地にはフィリピンの法人格を得て「目の前の子どもを救いたい」と医療支援も親子支援も手がける。現在、孤児や貧困家庭の子ども約6200人に大学卒業までの学費や下宿代などを奨学金として支給している。このうち約1000人は自宅からの進学が困難などの理由でMCLに住み込み、共同生活を送る。日本などで子ども1人につき1人の支援者(年間3万5000円)を募っているが、半数近くの子どもの支援者は届いていないという。

奨学生はMCLのスタッフとして新たな子どもたちの支援にも携わっている。イスラム教徒、キリスト教徒、先住民族と民族や宗教の違いを認め合い、直面する問題を解決しようとする。彼らに平和で貧困のない社会を実現してほしい」と願う松居さんは、移住して「神様はちゃんと見てくれると願う、励みになります。少しでも多くの方に現状を知ってもらいたい」と話した。



## 山菜売りの少女 4

前号からの続き

キャンキャンキャン

犬は、女主人の怒った顔と、ふりあげた小枝を見て、悲鳴をあげて逃げだした。

ギンギンとクリステインは、頭の上のタライを下におくと、散らばったパコパコをひろって、ジョイジョイのタライにもどしていった。

太った女は、子どもたちを見て、一瞬あわれそうな顔をした。しかし、手をポケットにつっこむと言った。

「ぼろをまとったネイティボ（先住



民）だね。

このあたりじゃ、山菜買う人はいないよ。町にでもお行き。」

そう言っつてポケットから、5ペソだまを出してわたしていった。

「これでキャンデーでも買いな。」

### 大きな岩

ふたたび頭にタライをのせると、ギンギンとクリステインとジョイジョイは、町に向かって歩きはじめた。

子どもだけで山菜売りをしていると、良いこともあるんだけど、怖いこともあるの。子どもの山菜売りは、あわれに思っつて買っつてくれるから、大人が売り歩くよりもよく売れるんだっつて。

でもねえ、とっつても、こわーいお話も聞いたの。人ざらいがいて、車が止まつてドアが開くと、そのまま車に押しこめられて、どっかにつれさられて行くことがあるっつて。

今度は、ギンギンのほうから、不思議な声にむかつて、話しはじめた。

不思議な声がかえつてきた。

「そらよ。特に女の子をさらつていっつて、外国に売るのはよ。だから、用心しなくつちやだめよ。」

でも、わたしたちが働かなくつちや、一家は食べていけないし……。

お日様は、頭の上まであがつて、お昼が近づいてきたのがわかる。ひたいから汗がタラタラと流れはじめた。

「重たいなあ、売れないと。」

「売れたら、軽くなるんだけどなあ。」

「カンコン、タクワイ、パコパコ。」

「カンコン、タクワイ、パコパコ。」

「山菜買っつてくださいなあー。」

やがて、でこぼこ道は、マノンゴル村に入った。日陰のない道は、暑くてどうしようもない。

三人は、木陰のある横道にはいった。村に入っつてから、家々は増えただけ

ども、高い塀に囲まれているし、暑いせいか戸が閉まつていて、人がいる気配がない。



さすがにちよつと疲れてきたので、三人は、バナナとマングステインの植わつている果樹園の小道にはいつて、その先にある大岩の陰で休むことにした。

大岩のそばには、火のようなまっ赤な花をたくさんつけた、大きな木が立っている。ファイアーツリーの大木。火の燃えている木という意味なんだつて。緑の葉の上に、たくさん花が咲くだけけど、その花が、まるで木に火花が飛びうつつて燃えているような感じなの。

その下に大岩があつて、ばあちゃんの話だと、昔はこのあたりが村の中心だつたつて。特別な日には、マノボ族の人たちが、岩のまわりにたくさん集まつて、踊りを踊つたり、お祈りしたりしたんだつて。

ギンギンたちは、大岩に着くと、ホツと一息ついた。岩の後ろは、日陰になつていてすずしい。岩の後ろは、日陰になつていてすずしい。

山菜のつまつたタライを頭から下ろすと、三人は、ドツと岩陰にたおれこむようにして腰をおろした。さわやかな風が吹いてきて、汗がスーッとかわいていく。

しばらくそこでウトウトしていると、村の方から、子どもたちの歌声が聞こえてきた。大勢で歌いながら、大岩の方へとやっってくる。

日々の活動を、豊富な写真で、随時更新報告しているMCLのサイト

<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>

ウェブサイト検索『ミンダナオ子ども図書館』、必見です!





「ロラロラロラ ロラロラレ ロラ  
ローラーローラー ロラロラレ ヘ  
イ！」

ギンギンたちは、大岩のうえに登ると、はいつくばつたまま、ソーツと岩から頭をぞかせた。

「ロラロラロラ ロラロラレ ロラ  
ローラーローラー ロラロラレ ヘ  
イ！」

「どうやら、小学校の子どもたちが十人あまり、午前の授業を終えて帰ってくるころのようだ。

「いいなあ、あの子たち。学校に行けて。お昼ご飯を食べに帰る家もあつて。」  
クリスティンがため息をついていった。

「わたしは、学校行けないもんね。」  
「お弁当ないもんね。」  
「ジョイジョイ  
がいった。

すると、ギンギンが、ちよつと強い調子でいった。  
「山菜売れなければ、夜ご飯だつて食べられないんだからね。」

「そつだよね。」

歌声は、だんだんこちらに向かつて近づいてくる。小学校の子どもたちだ。野原の花をつんで耳にさしたり、小枝をふりまわしたり、跳んだりはねたりしながら近づいてくる。そのなかには車いすの少女もいて、他の子たちが、かわるがわる後ろから押している。

子どもたちは、大岩の手前までくると立ち止まった。髪の毛の縮れた小柄な少女が、ちよつとかすれた声でいった。

「この岩。妖精の住みかなんだよ。」  
子どもたちのなかの半分いじょうは、色も黒いし、何人かは髪の毛もぢぢれ

ていて、どう見ても先住民だ。  
「昔はこのまわりで、マノボ族の人たち、踊つたり歌つたりしてたんだつて。」

「酋長を囲んで、お祈りもしたんだよ。」  
「インカルばあちゃんいつてたよ。今もこの岩には、妖精が住んでいるつて。」

「酋長の名前は、マオンガゴン！」  
ちよつと年上の男の子が、歌うようにいった。

「あれ！」クリスティンは、思わず耳をうたがった。  
「ばあちゃんが、いつていた言葉が、記憶のなかによみがえつてきたからだ。」

「たしかばあちゃんは、こんな事をいつていた。マオンガゴン酋長は元気かね。会つたら、わたしからもよろしくつ

てね。」



て伝えておくれ。もうじきそつちに行く日も近いだろうつて。」

さつきの男の子が、今度は神妙な顔を

をしていった。  
『タビタビ ポー』つて言つて、このは通らなくちゃだめなんだ。特に夕暮れ時にはね。」

「タビタビつて、どういう意味？」  
「お願いします、通してね。という意味。」

「そういつと、子どもたちは、大声で  
「タビタビ ポー タビタビ」  
「タビタビ ポー」  
「タビタビ」といいながら、大岩の前

を通りはじめた。

ギンギンたちは、大岩の上から、わずかに頭をだして、子どもたちが通りすぎて行くのを見まもつた。

ギンギンが、ひそひそ声でいった。  
「あの子たち、みんな同じリュックしよつてるよ。」

「本当だ。赤と緑の布地に黒でMC  
しよつて書いてある。」  
学校帰りの子どもたちは、大岩のそばを通りぬけると、歌いながら、お昼

を食べに帰つていった。  
ギンギンとクリスティンとジョイジョイは、岩の上から子どもたちを見お

くつた。そのようすがあんまり楽しそうなので、ギンギンは、思わずため息をついていった。

「わたしも学校、行きたいなあ。もし大学卒業できたら、もつと母さんたち、助けられるのになあ。」

「姉ちゃん、大学まで考えているの。小学校すら大変なのに。」クリスティンがいった。

「夢は、高く持つものよ。」  
ギンギンは、そうはいつたものの、どうしたら大学まで行けるのか、けんとうもつかなかつた。

小さなジョイジョイも、クルクルした目を見開きながら、うらやましそ

うにいつた。  
「いいなあ。わたし、小学校だけで

郵便振替口座番号 00100 0 18057

加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』

購読料程度の自由寄付でも結構です。よろしくお願ひします。



もいきたいなあ。字が読めて、計算で  
きて。」

「計算だらたらわたしできるよ。」ク  
リステインがいった。

「カンコン一東、五ペン。タクワイ一  
東一〇ペンだから、三東で三〇ペン。パ  
コバコ二東五ペンだから、二東で一〇ペ  
ン。あわせて四五ペン。」

三人は、大岩からとび降りると、お  
いてあつた山菜のつまつたタライを頭  
のせて、岩から離れて歩きはじめた。

町までは、まだまだ遠い。

ギンギンたちが、大岩から遠ざかっ  
ていくとき、大岩の上から、ギンギン  
たちが去っていく後ろ姿を、しずかに

見まもっている影があつた。

緑色の帽子を頭のにせて、それぞれ  
青と赤と黄色の服をまとつた三人の妖  
精たち。さらにその後ろには、他の妖  
精たちもいる。その中の一人は、飛び  
ぬけて背が高く、かっぶくの良い男の  
妖精。マノボの酋長が着るような、刺  
繍の入つた紺色の衣装と、これまた刺  
繍の入つた茶色のズボンに身を固め、  
頭に茶色の頭巾をかぶっている。

そのわきを取り巻いているのは、色  
とりどりの服を着た、七人の妖精の男  
の子たち。妖精の男の子たちのなかで、  
いちばん大柄な少年が、去っていくギ  
ンギン、クリステイン、ジョイジョイの  
方をじつと見つめながらつぶやいた。



「あの子たちが、何の罪もないのに土  
地を追われて、父さんが殺されたつて  
いう、マノボ族の子たちなんだね。」

マノボの酋長らしき妖精が、去つてい  
く子どもたちの後ろ姿を、いつまでも  
じつと見つめながらいった。

「そうだよ。彼らの母さんのことも、  
ばあちゃんのこと、わたしはよく知っ  
ている。もちろん、子どもたちのこと  
もね。」

## 町で

マノゴル村でも、山菜は売れず、  
ギンギンたちは、コンクリートの道を  
町に向かつて歩きはじめた。両脇には、  
コンクリートの高い壁でおおわれた、  
お金持ちの家々が建っている。ガレー  
ジがあつて、自動車がおいてある家も  
ある。

そのとき、緑色の軍用車が五台つら  
なつてやつてきて、山菜売りの少女たち  
のすぐ横を、ものすごい勢いで走りぬ  
けた。後ろの座席には、鉄砲を手に持っ  
た兵隊たちがたくさんついている。

「山でまた、戦争が起こつているの  
ね。」

クリステインがそういったとたん、つ  
づいて二台のオートバイが、緑の服を

着た三人の兵隊を乗せて、エンジンの  
音をたてながらトラックの後をおいか  
けていった。

「姉ちゃんがいる、山かなあ」ジョイ  
ジョイがつぶやいた。

「こわいね」ギンギンがいった。

コンクリートの坂道を下つていくと、  
やがて三人は国道に出た。

パン屋さんの角を左にまがると、子  
どもたちは、キダバワンの町中に向かっ  
て歩きはじめた。大きな教会の前をと  
おり、町の中心に近づくにつれて、自  
動車、トラック、バスやジブニーが多  
くなり、それらに混じつて、たくさん  
のトライシクルやバイクがぬうように  
走つていく。

運転手も乗っている人たちも、行く  
先をじつと見つめたまま、山菜売りの  
子どもたちがいることなど気づけな  
い。たとえ気がついていても、激しく警笛  
をならすだけで、止まつて山菜を買つ  
てくれるわけではない……。

お店で買い物をしている人たち以外  
は、歩いている人はほとんどいない。  
町中に向かつて歩いているのは、山菜売  
りのわたしたちと、お金がない浮浪者  
とストリートチルドレンぐらいで、み  
な、トライシクルにのつて移動してい  
る。元気なはずの、若者や子どもたち  
まで、自転車つきのトライシクルにのつ





たりしている。

山だと、歩いていく人がほとんどな  
んだけれど・・・。

「お金がなくちゃ、町には住めない  
ね。」クリスティンがいった。

「わたしたち、ここに住んだら、浮  
浪者かストリートチルドレンになるし  
かないな。」ギンギンがつぶやいた。

町に近づくにしたがつて、お店の数  
が増えはじめた。オートバイの修理屋、  
ペンキ屋、金物屋、看板屋、家具屋、  
そして町の中心に近づくにしたがつて、  
文房具屋、日用雑貨屋、中古のテレビ  
屋。

そのあたりまで来ると、人通りも多く

にぎやかになりはじめた。買い物をし  
ている人たちが増えてくるさまさまな

食堂、パン屋、お菓子屋、床屋、古着屋、  
電器屋、薬屋などなど、ありとあら  
ゆる店がならんでいる。

「カンコン、タクワイ、パコパコ。」

「カンコン、タクワイ、パコパコ。」

「山菜買ってくださいなあー。」

ギンギンたちは、薬屋さんの前まで  
来ると、売り場にいるお姉さんたちに  
声をかけた。

みんなちよつとビックリしたようだが  
たが、一人のお姉さんが、貧しい格好  
の少女たちをみて、ほほ笑んでいた。

「何のお野菜、持ってきたの。」

「カンコン、タクワイ、パコパコ。」

薬がならんでいるガラスのショー  
ケースの上に、ギンギンたちは、山菜  
のはいたタライをおいた。ほかのお姉  
さんたちも、よつてきていった。

「キャベツとか、ニンジンはないの？」

「あれまあ、山菜だけなのね。」

「・・・」

黙ってしまった子どもたちを見て、  
最初に声をかけてくれたお姉さんが  
いった。

「わたし、買うわ。タクワイとパコパ  
コにしようかな。」

長い髪の毛をリボンで後ろ手にむす

んだお姉さんが、タライのなかから、

タクワイを二袋とパコパコの束を二つと  
りだしてたずねた。

「おいくら？」

「タクワイ一袋10ペソ、パコパコ一束  
5ペソだから、全部で30ペソ。」

クリスティンがこたえと、お姉さ  
んは、ポケットからおさいふをだして、  
なかから30ペソとりだすと、ジヨイ  
ジヨイにわたした。

それをみて、他の売り子のお姉さん  
たちも、「わたしも、買おうかしら」と  
いって、少しずつだけれど、山菜を買っ  
てくれた。

ギンギンもクリスティンもジヨイジヨ  
イも、おおよろこびで、ふたたびタラ  
イを頭にのせると、薬屋を後にして市  
場の方にむかつて歩きました。

きゆうに、人通りが増えてきた。道  
ぞいの空いている場所には、鳥の串焼  
きや丸焼きを焼いている屋台。バナナ  
やマンゴーなどの果物を並べている売  
り台。

ギンギンたちは、木の台の上で、シ  
ンカマス（砂糖大根）を売っているおば  
さんたちがいる角をまがって、市場に  
入っていった。

続く

電話番号：080-4423-2998（日本から現地直通）

09219603640（Tomo Matsui Cell phone in Philippines）

日本事務局；Fax 専用 093-473-7710（内容は本部に転送されます）

メール：mclstaff@zar.att.ne.jp（松居友）

# Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない  
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも  
はるかに美しいと感じるときだってある。  
けれども、どうにもならないのが、  
一日三食たべられないときと、  
お金が無くて学校に行けないとき  
病気になっても病院に行けないとき・・・



## ミンダナオ子ども図書館支援方法

- 1、医療や読み聞かせ活動を支援して下さる方々へ・・・自由寄付（購読料のつもりで気軽に）**  
直接下記の振替口座をお願いします。寄付をくださった全ての方々には、  
年四回、4月、6月、8月、10月、12月に季刊誌『ミンダナオの風』をお送りしています。
- 2、大学生高校生スカラシップ支援の方へ・・・年額60000円（月額5000円）**  
振り込み用紙の通信欄に「スカラシップ」と書いて、一部振り込んでいただければ、  
年5回の季刊誌に同封して、本人からの手紙、4月スナップ写真、6月に成績表  
8月にプロフィール、10月は機関誌のみ、12月にクリスマスカードなどが届きます。  
新規奨学生の紹介は、随時プロフィールと写真をお届けします。  
文通やプレゼントも可能です。訪問の際は、自宅にご案内します。
- 3、里子支援（小学生）・・・年額30000円（月額2500円）**  
振り込み用紙の通信欄に「里子」と書いて、一部振り込んでいただければ、季刊誌に同封して、  
4月にスナップ写真、6月は機関誌のみ、8月にプロフィール、12月にクリスマスカード  
が届きます。新規里子の紹介は、随時プロフィールと写真をお届けします。  
文通やプレゼントも可能ですが、隔月の学用品と一緒に僻地に届けて返事をもらうため  
返事は機関誌に同封する形で半年ほど後になる可能性があります。訪問の際は自宅にご案内。
- 4、保育所・下宿小屋建設支援・・・30万円（分割可能になりました）**  
振り込み用紙の通信欄に「保育所」または「下宿小屋」と書いて振り込んでいただければ、  
季刊誌をお送りすると同時に、10月には毎年現地の保育所や下宿小屋の写真報告をお届け。  
開所式参加や訪問も可能です。
- 5、植林環境支援・・・5万円（ゴムの木600本、1ヘクタール、現地作業代込み）**  
洪水対策と先住民族が土地を手放さないようにするための、自立支援です。
- 6、古着等の物資支援・・・郵送およびフィリピン宅配フォーレックスが便利です。**  
Forex フリーダイヤル：0120-77-3583, 3584

詳しくはウェブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館」

<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>

**ゆうちょ振り込み口座 00100-0-18057：加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』**

（インターネットバンキングも可能です） ■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900  
■店番 019 ■預金種目 当座 ■店名 ○一九店（ゼロイチキユウ店） ■口座番号 0018057

スカラシップ・里親に関する質問、または現地訪問その他に関する問合せは、メールが最適です

[mclstaff@zar.att.ne.jp](mailto:mclstaff@zar.att.ne.jp)（松居友メール）

電話番号：080-4423-2998（日本および現地転送・松居友）

日本事務局；Fax 専用 093-473-7710（内容は本部に転送されます）

現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

Brgy. Manongol Kidapawan City North Cotabato 9400 Philippines